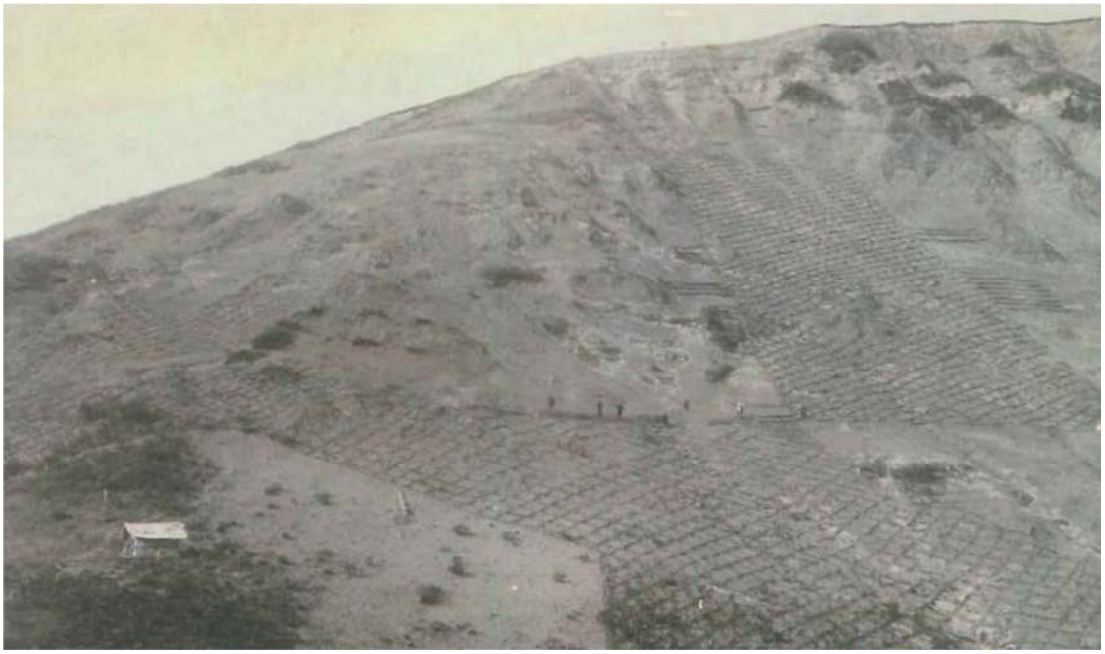
安曇野市の里山の変化



大正年代の光城山（撮影年不明）　画像提供：下里 督　氏

かつて里山は、薪や枝を採取して燃料とし、落ち葉や若い枝葉を肥料として使用するなど、生活資源の採取の場でした。そのため、過剰に利用されることもありました。

現在の光城山（平成 27 年 1 月）

上の写真と同じ構図で光城山を撮影したものです。このように、現在は多くの里山で樹林化が進んでいます。

安曇野市の里山の変化

明科荻原区の風景（昭和 30 年頃）　出典：治山の実績（1960）長野県犀川治山事務所

平成27年の今日からみれば、ほんの60年前ですが、その頃の明科地域では里山には木が少なく、生活資源として利用されていたことがうかがえます。

明科潮沢区天田集落の風景（昭和 35 年頃）　画像提供：内川 利喜夫　氏

山あいの集落では、木を伐（き）って、桑や麦を育てていました。

安曇野市の里山の変化

植林作業（昭和 50 年代）　　画像提供：松本広域森林組合

昭和20～30年代は戦後の復興で木材需要が急増し、針葉樹中心の人工林に置き換える拡大造林政策が実施されました。各地に広がった植林ブームは、昭和50年代まで続きました。

カラマツ植林地下刈り（昭和 50 年代）　　画像提供：松本広域森林組合

植林後5～10年間は、苗木の成長の妨げになる雑草や低木を刈り取る作業（下刈り）を毎年夏におこない、良質な木材確保に努めました。

安曇野市の里山の変化

放置され荒れた里山（平成 26 年・明科上押野区）

高度経済成長により、家庭燃料は薪や炭から電気・ガス・石油に切り替わり、外国から安価な木材が輸入され、国産材の需要は減少しました。そのため、市内の里山は、間伐などの手入れが行き届かず放置されることも多くなりました。

伐採により再生される里山（平成 26 年・明科下押野区）

放置された里山では、様々な問題が起きています。松くい虫による被害の増加も問題のひとつといわれています。市では、被害木を伐採し広葉樹林に転換させる「更新伐」など、荒廃した里山を再生させる様々な取組が進められています。